

<教育目標>



英知の風かおり 友愛の情ふかく 精励の志つねに

新しい^ま都会^ちに (中野中だより)

平成 29 年 6 月 30 日発行

No. 5 校長 矢口 仁

夏には読書を！ — 本を読む意義 — 校長 矢口 仁

朝顔や 道ゆく人に咲いており 森島 緋紗恵

朝顔は、七夕の頃に咲くので、牽牛花(けんごし)とも呼ばれます。(秋の季語です。) 幼い頃の夏休み、鉢の朝顔に早起きして水やりをした記憶があります。だんだんと夏休みが近づいてきました。たっぷりとある自分の時間を上手に使い、心も身体も一回り大きく成長させてほしいと思います。



さて、「学校読書調査」によると、中学生が昨年5月の一か月に読んだ冊数は平均4.2冊、一冊も本を読まなかった生徒の割合(不読率)が15.4%でした。多忙な中学生が毎週ほぼ1冊の本を読んでいるということを素晴らしいと思う反面、不読率が高すぎると感じています。ゴールデンウィークを利用して多くの本が読めた生徒がいる一方、部活動の練習・大会で時間を割かれるなど、二極化傾向があるのでしょうか。

本校では、読書活動の推進を教育活動の柱の一つに掲げ、目標を「月に2冊以上、年間24冊以上」としています。昨年度、目標を達成できた生徒は約50%でした。

読書のよさは、言葉や知識を豊かにし、読解力を高めるだけではありません。本の中で、時や国境を越えて多くの人に出会い、人の考え方や気持ち、生き方を知ることができます。そのため、考え方や心の持ち方の幅が広がり、人間性が豊かになります。

朝礼で「あと少し、もう少し(瀬尾まいこ著)」という小説を紹介しました。

榊井君の所属する陸上部は、3年生になった時に名物顧問が異動となってしまいます。さらに、毎年県大会に出場していた駅伝のメンバーも足りなくなります。榊井君は部長として、吹奏楽部やバスケット部、学校をさぼっている大田君にも声をかけ、必死に協力を求めます。何とか6人が集まり、必死に練習し始めます。大会当日、県大会を目指して6人がタスキをつないでいきます。最後には「あと少し、もう少し」このメンバーで走りたい……。陸上部を舞台にした感動できる青春小説です。

部長の悩み、頼まれたらいやと言えないジローの心理、不良少年大田の心境の変化、新しく顧問になった美術教師の葛藤……皆、悩みながらも、前向きに駅伝練習に取り組む姿が生き生きと描かれ、勇気をもらうことができます。

夏休み、学習や部活動、また、普段できないような体験をすることを望みます。その中の一つに「読書」による体験を加え、考えを深める時間をもってください。